

身近な課題に取り組み生きる力を育む 地域で育むキャリア教育

当事者意識をもって 自分の未来とまちの未来を デザインする力を育む

第28回 防府商工高校
(山口・県立)

取材・文／江森真矢子



山口県のほぼ中央、瀬戸内海に面した人口約11万人の都市、防府。商業科・情報処理科・機械科の3学科を擁する防府商工高校は、JR防府駅近く、市の中心部に位置している。

生徒の進路は就職と進学が約半々。就職希望者1人に対し10社以上の求人があるほど企業からの信頼が厚く、進学においてはここ数年、20人前後が

国公立大学に進学している。生徒の多様な進路希望を応援する同校は、十数年前から社会人基礎力の育成を目標に掲げ、実践を重ねてきた。その方法論は当時から、地域に出て異世代と関わることで自分を知り、未来をデザインする力をつけるというものだ。

クラスごとの事業部制で行う 天神まちかどフェスタ

多彩な活動のなかで、毎年10月に行う「天神まちかどフェスタ」は生徒の「楽しみな行事」として圧倒的1位に君臨し続けている(新聞部アンケートより)。会場は天神町銀座商店街と駅前商業施設。クラスごとに店舗を出すほか、演劇部によるバナナの叩き売りなどのアトラクションや、機械科の工作物展示もあり内容は盛りだくさん。18回目となるはずだった昨年度はコロナ禍のもと中止になったが、第17回は6千人を超える来客でまちが賑わった。

ユニークなのは運営組織。全校を1つの会社、クラスを事業部に見立て、3年生の事業部長・副部長の中から社長・副社長が選出される。各店舗純利益2万5千円の目標が課され、終了後

の総会では決算報告や優秀事業部の表彰、社長による総括がなされる。仕入れ先は自由で、東日本大震災の折には震災復興の助けになるよう、東北から仕入れた例もあるそうだ。

「生徒は一生懸命売ったものの利益が薄いことや、高価でも飛ぶように売れることに直面し、驚いたり納得したり。商業科の観点からすれば教室の学びをリアルに活用する場です。ただそれよりも、こうしたPBLは生徒の達成感や自信につながっていると感じています」と中村英哲先生。

5月から始まるクラスでの活動は、合意形成や役割分担を学ぶ時間。お客さんにありがとう、と言われた喜び、取引交渉がうまくいかなかった失意、赤字を出したときの落胆。頭も心も動かしながら、社会人基礎力に示された「考え抜く力」「チームで働く力」「一歩踏み出す力」を発揮する機会が存分にある半年間だ。

ねらいはキャリア形成と シビック・プライドの醸成

「天神まちかどフェスタが目立ちますが、地域でのPBLは授業の中でもた

地域と連携した学習活動

()内は活動の内容 ★は写真に対応

| | 教科・科目 | | | 特別活動 1～3年次 | 課外活動 |
|--------------|-----------|---|--|-------------------|--|
| | 総探 1年次 | 課題研究 3年次 | その他 | | |
| 商業科 9年級 | | 班別PBL 班により 地域で活動 | 総合実践 ★2 (事業所模擬社員/ 商品やサービスの企 画提案)商品開発(事 業所との商品開発) | 天神まちかど フェスタ ★4 | ボランティア活動 [部活動] 地域デザイン部 (イベント参加等) [機械科有志] 地域連携サークル (リモート体験入学 の企画運営) ★5 |
| 情報処理科 3年級 | | 例:ふるさとパ ワーアップ班 (商業科)、ホッ トショップ店舗 経営班(商業 科)、農大連 携班(機械科) ★1 | 総合実践 ★3 (防府市高校生職員 /各課に配属され施 策の企画提案) | | |
| 機械科 6年級 | | | 実習 (1年間の企業研修で 商品開発等 ※希望 者) | | |

School Data

1928年創立/商業科・情報処理科・機械科/生徒数:716人(男子373人・女子343人)/進路状況(2020年度実績)大学56人・短大9人・専修50人・就職121人。キャリア教育優良学校表彰受賞(2019年度)



★4 天神まちかどフェスタ

オープニングセレモニーでは代表取締役社長(生徒)が挨拶しテープカット。各クラスの出店のほか、PTAや定時制生徒、部活動によるコーナーも

★5 地域連携サークル リモート体験入学



新型コロナウイルスの影響で開催が見送られた体験入学。自分たちでできることをしようと有志生徒が企画、実施した

商業科、情報処理科、機械科の3学科を擁する防府商工高校。学科にかかわらず、教科・科目や特別活動の時間で地域連携による学びの機会が多くあります。イベント企画やコンテンツ開発、学校間連携などを統括するのは校務分掌に置かれた「未来デザイン部」。全校生徒が出店し、毎年数千人を動員する「天神まちかどフェスタ」は防府のまちの風物詩ともなっています。



(左から)中村英哲先生(未来デザイン部部长)、藤村慎一郎校長、出水一弘教頭 ※取材時(2021年3月)

くさんあって、私たちも把握するのが難しいぐらい」と出水一弘教頭(取材時/現県教育委員会事務局)。LHRと月曜7限の「チャレンジタイム」を使うフェスタのほかに、3年次3単位の課題研究や2単位の総合実践で多種多様な活動が行われている(下図)。

活動に徹底するならば、まちの人と関わりながらキャリアを形成していくことに加え、シビック・プライドを育てること。「ただまちに愛着をもつのではなく、当事者意識を伴う責任感や、参画意欲を伴う市民性のことです。課題研究や総合実践では、連携先から課題を提示される班もありますが、生徒が問題意識をもち、課題を認識できるよう導いてほしいとお願いしています」と中村先生。

連携先は企業や市役所、市内の農業大学校や小中学校もあり、5〜10人程度の班単位で動く。校内で調査や

準備をする班もあれば、毎回、連携先に出向く班、放課後や週末にも活動する班がある。動き方は班に任せられており、共通するのは活動の中間発表と最終発表を校内で行うこと。

中村先生は「クラスで発表する班代表はくじで決めます。発表内容も好きなことを発信して、と特に形を示しているわけではありません。でも、どの生徒に当たっても自分なりに課題を捉え、活動し、振り返って考えたことが伝わる質の高いもので感心します」。出水教頭は「本校の生徒の学びに対する意識は高い。勉強したことが何に役立つのか膨らませて考え、何かに挑戦する意欲が育っているように思えます」と言う。

教育と地域活性化の視点をもつ学校運営

ダイナミックな地域連携を支える仕組みに、校務分掌に置かれた「未来デザイン部」と2017年からスタートしたコミュニティ・スクールによる学校運営がある。

未来デザイン部部长でもある中村先生は「変わった名前ですが、デザインとはただの発想ではなく問題解決である、という考え方です。問題認識をし、課題設定をし、課題解決をするのが問題解決。このプロセスは人生その

ものであり、まちそのものの、その繰り返しがキャリアを形作ります」と解説してくれた。チャレンジタイムの企画運営などを行うほか、学校が行う地域活性化のための情報発信やコンテンツ・商品開発を司る「知財マネージメント戦略センター」も置く分掌だ。

「地域に学ばせてもらう」のではなく、学校や生徒も地域の一人であるとの姿勢はコミュニティ・スクールのあり方にも表れている。掲げるテーマは「ビジネスとものづくりを学ぶCOO(Center of Community)〜学問のまち「防府」における学び合い・教え合いの拠点に」。双方が教育と地域活性の視点をもち、影響を与えあう協働を目指しているのだ。

こうした考えに至ったのは、20年近く前から地元企業と商品開発をする中で「高校発の商品は一時の話題にはなるが、地域の活性化にどう役立つのか、生徒にどんな力をつけようとしているのか」と問われたことがきっかけだった。地域からの問いかけは高校が社会人基礎力育成を掲げ、地域視点に立つことにつながっていった。

自分のための学びから、みんなのための学びへ、自分の未来もまちの未来もデザインできる力を。教員たちが地域から学んだことは今、生徒の中に確かに息づいている。



★1 課題研究

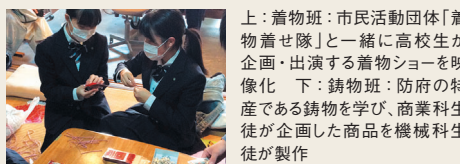


左:ふるさとパワーアップ班・幸せますカメラ女子部は「防府市のHAPPYなシーン」を高校生目線で発信する

右:生徒が考案した「幸せます弁当」を地元スーパーマーケットで販売



★2 総合実践



上:着物班:市民活動団体「着物着せ隊」と一緒に高校生が企画・出演する着物ショーを映像化 下:鋳物班:防府の特産である鋳物を学び、商業科生徒が企画した商品を機械科生徒が製作

★3 総合実践
防府市高校生職員半年間、市役所職員のアドバイスを受けながら考えた、市の課題改善の施策を市長に直接提案する

